



Title	法隆寺金堂壁画・薬師浄土上部壁など〈山中羅漢図〉18面の復元
Author(s)	松田, 真平
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 144-145
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53082
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

法隆寺金堂壁画・薬師浄土上部壁など〈山中羅漢図〉18面の復元

松田真平／東大阪大学短期大学部

はじめに

法隆寺金堂壁画・山中羅漢図（1949年焼失）全18面の中で、十号壁（薬師浄土）上のものについては、絵柄についての情報が殆ど知られていなかった。筆者は、主に戦前発行の出版物中から、金堂内部のモノクロ図版の中に、この壁の痕跡が捉えられているものを発見し、4～5種類の写真を合成することで、その構図の概要を推定することができた。すでに法隆寺の機関誌『聖徳189号』（2006年）に紹介済みの部分も多いが、学会発表はこれが最初となる。さらに、今回の発表では、かつて本学会で紹介したことのある、七号壁上の山中羅漢図の樹木名を、インドや中国敦煌の遺例や平城宮跡の庭園の植物遺体から再検討し、樹種を特定した。

1. 十号壁（薬師浄土）上の山中羅漢図の概要

図1 a, 図1 bは、この壁画の構図を推定復元するための、もとなつた写真のそれぞれの出典と、それらをCGで組み立てた状態を示したものである。出典は以下の通りである。（この復元は、斜めに写っている写真も、薬師浄土の群像の位置と建物の木組の関係から割り出し、正確に正面向きに直したが、フラットな平面に対する最も原始的なCG画像処理であるため、比較的容易な作業であった。細部にご関心のある研究者は、ぜひ以下の資料で再度お試しになってほしい）。

- 左上と左側下部：内藤藤一郎『飛鳥時代の美術』（第三図）大雅堂 1934年
- 左端：『特別保存建造物及国宝帖 第二』（金堂釈迦三尊像背景部）審美書院 1911年
- 右側から中央部：荒井寛方『阿弥陀院雑記』（P. 43の手前頁写真）鶴故郷舎 1943年
- 右上と右側下部：『世界美術全集 9 日本1』（P. 28, 金堂薬師如来像背景部）平凡社 1955年

以上の写真資料以外にも、火災直後の新聞報道写真で、右端の一角などが捉えられている写真もあり、それらからは、絵柄は殆どわ

からない場合も多いものの、オリジナルの壁の中でどこが崩落せずに残ったか、といった貴重な情報が得られる。火災により、絵柄が残っていた表面の大部分は崩落し、失われたとされるが、未調査断片が法隆寺に残る。

先述の『阿弥陀院雑記』所収の写真では、十号薬師浄土の前で模写する画家の上側にこの壁の部分がかなり大面積で捉えられており、特に、壁画内に向かって右側の座像は、法隆寺壁画において今まで未知の構図だったため、とりわけ貴重な知見と考えられる。正面向きに座し、片膝を立て合掌する形の修行僧の痕跡である（図2）。

2. 七号壁（聖観音）上の山中羅漢図の樹木

かつて、筆者のパネル発表要旨（『デザイン理論 No. 46』P. 193, 2005年）に、法隆寺金堂壁画七号壁（聖観音）上の山中羅漢図の樹木が「クスノキ」か「コナラ」の合成であろう、書いたことがあるが、これは、その研究時点において、枝先の葉の付き方がランダムなものと推定したこと（剥落した不確実な痕跡が描かれた明治の模写画が基本史料）に起因する。その後、葉の描き方のルーツを比較検討したところ、インドでは実在する常緑樹がルーツで、敦煌初唐期に実景的に描かれた樹木（図3）では「菊花点」という葉の描法が用いられ、これが日本において、古代から庭木等に使用されたコナラ属の常緑樹の「檜」の描法として受容された可能性が高いことを知った。唐代の仏教壁画・敦煌17窟「樹下人物図」や正倉院の「鳥毛立女屏風」の唐風の樹木は、実際に中央アジアなどに広く分布する楊の1種ギンドロ（ウラジロハコヤナギ）*Populus alba* L. と考えられ、その地でなじみ深い樹が直接アレンジされている。法隆寺山中羅漢図（図4）においては、同じ広葉樹でも奈良盆地に多く見られる一位檜（図5）がアレンジされたらしいことが、葉や幹の特徴から推定できる。

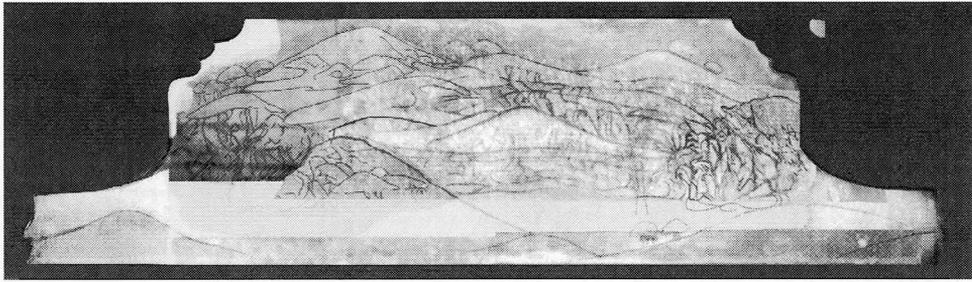


図1 a 十号葉師浄土上の山中羅漢図（輪郭線を補筆して見えやすくしたもの）

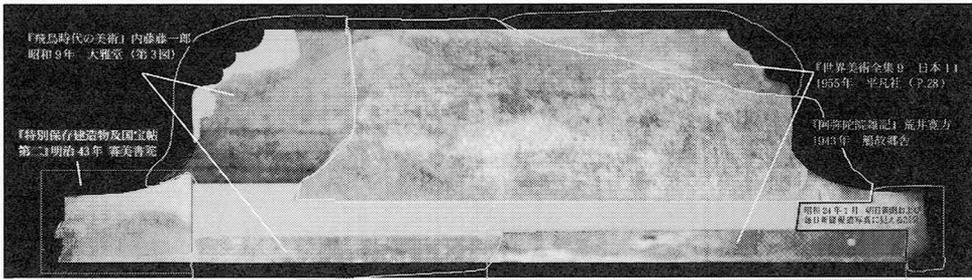


図1 b 十号葉師浄土上の山中羅漢図

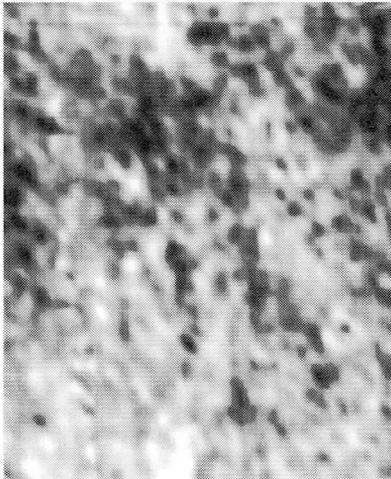


図2 図1の壁画右側人物の上半身拡大。顔を正面に向け、頭巾をかぶり、合掌する形の修行僧の痕跡と考えられる

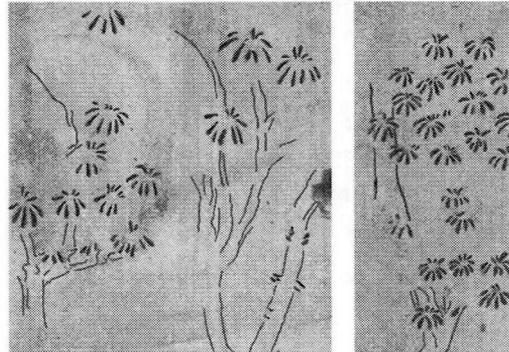


図3 敦煌323窟 張騫西域出資図の部分（初唐）（関友恵氏の模写を参考に、輪郭をCGでなぞり、葉の描き方を解りやすく図示したもの）

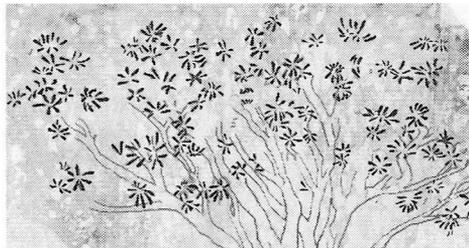


図4 金堂壁画七号壁上山中羅漢図の葉の部分の推定復元。「菊花点」の葉の描法で復元可能。一位樅（イチイガシ）などの樅（常緑樹）を思わせる表現である

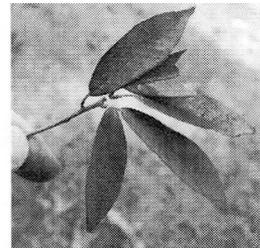


図5 一位樅（イチイガシ）*Quercus gilva* Blume.（奈良公園にて）